

（附圖錄二件）

北野遺跡発掘調査報告書

東京都文化財調査報告書 第四十一集

2003

東京都教育委員会

序 文

泉南市は近年の開発の増加に伴い、その姿を大きく変えてきました。とくに空港建設時はバブル景気もあいまって開発が相次ぎ、その結果多くの遺跡が周知され、その数が飛躍的に増大することとなりました。

今回報告します北野遺跡は、比較的古くから周知されていたにもかかわらず、これまでほとんど調査が行なわれていませんでした。しかし本遺跡が立地する桜井川左岸地域は1990年代になって一挙に遺跡発見が相次いた地域であり、同様の時代に属する遺跡が集中する地域もあります。本書により本地域の歴史の解明がより一層進展することが期待されます。

最後になりましたが調査に際しご協力、ご理解をいただきました関係者の皆様に対しまして御礼申し上げますとともに、文化財保護行政により一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月31日

泉南市教育委員会
教育長 亀田 章道

例 言

1. 本書は、大阪府泉南市信達大苗代660-1地内における店舗建設に伴う北野遺跡発掘調査の報告書である。
2. 調査は、同地内の埋蔵文化財包蔵地における土木工事の届出にもとづいて行った。
3. 調査は、泉南市教育委員会 社会教育（現・生涯学習）課 石橋広和を担当者として平成3年7月23日から8月2日まで行った。
4. 本書の執筆・編集は石橋が行った。
5. 調査における出土遺物および図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望む。

凡 例

1. 本書の北方位は第1・3図-座標北、第2-真北、第4図-磁北を示している
2. 本書記載のレベル高は T.P.（東京湾標準位）+の数値を使用しているが、T.P.の記号は省略している。
3. 遺構名称は、SB-掘立柱建物、SD-溝、SE-井戸、Pit-柱穴とし、遺構番号は二桁と一桁の場合、その前に0を付している。
4. 実測図と遺物写真図版内の番号は一致する。
5. 遺物実測図の断面は須恵器-黒塗り、土師器-白抜き、内外面は黒色土器-トーンのように塗り分けている。

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章 層序	2
第Ⅲ章 换出遺構	5
第Ⅳ章 出土遺物	6
第Ⅴ章 まとめ	8
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 既往の調査と周辺の遺跡	1
第2図 横井川左岸の遺跡	2
第3図 トレンチ配置図	2
第4図 遺構平面図及び土層断面図	3・4
第5図 出土遺物	7

図版目次

- P L. 1 トレンチ全景（南から）・トレンチ詳細（西から）・トレンチ詳細（西から）・トレンチ詳細（東から）・Pit01遺物出土状態（北から）
- P L. 2 トレンチ全景（北から）・SE01（北から）・SD01（南から）・土層断面（東から）・土層断面（北から）
- P L. 3 出土遺物1・出土遺物2
- P L. 4 出土遺物3・出土遺物4

第Ⅰ章 調査に至る経緯と遺跡の位置と環境（第1～3図）

北野遺跡は、大阪府泉南市信達大苗代（おのしろ）・北野・中小路（なこうじ）地内に位置する。この周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれる信達大苗代660-1地内において店舗建設が計画され、土木工事に伴う届出が文化庁長官宛になされ、発掘調査を平成3年7月22日から8月3日まで行った。

調査区は、遺跡の中央や北より部分で北西部分が市域を横断する国道26号線と接する。地形的には市域の北東、泉南市と泉佐野市・田尻町を分ける櫛井川左岸に沿る低位段丘面上に立地している。この櫛井川左岸地域の遺跡の大半が1990年代以降に発見されたのに対し、すでに1970年代には、サヌカイト片が散布することで遺跡として周知されていた。

北野遺跡における最初の調査は1980年にまで遡る。55-7区^⑨は本調査区から南へ約30mの地点に位置し、本調査と同時期の平安時代後期の3棟の掘立柱建物、土坑などが検出されている。その後は、遺跡の西部や東縁辺部で数件の小規模な調査が行なわれているが、明確な遺構は検出されなかった。しかし1999年には同じく本調査区から南東50mに近接する99-3区第1-2トレンチから平安時代後期の掘立柱建物が4棟以上確認^⑩されている。これにより本遺跡の中心から国道26号線までの地域には平安時代後期に限定されるかなり規模の大きな集落が存在したことが明らかになっている。

次に周辺の遺跡に目を転じてみたい。最も古いものは、北西約600mに位置する岡田西遺跡から有舌尖頭器、最も櫛井川よりに位置する岡田東遺跡⁹では、縄文時代早期後半の「高山寺式」に比定される土器が出土している。弥生時代では、岡田西遺跡の北西に接する氏の松遺跡から前期の集落¹⁰や、岡田東遺跡から終末期の集落などが確認されている。古墳時代では岡田東遺跡から後期の集落¹¹、古代では北東約



第1図 既往の調査と周辺の遺跡

400mに位置する海会寺跡から白鳳期の寺院とその建立氏族の集落が確認されている。

しかし、この付近の遺跡は中世以降のものが多数を占める。南約250mに位置し北野遺跡と接する大苗代遺跡からは集落とそれに伴う排水の機能を持つと考えられる溝や土坑、南西約450mに位置する中小路南遺跡からは鎌倉時代の井戸や集落、岡田西・氏の松遺跡からは、平安時代末から近世に至る耕作に伴う水路、耕作痕などが多く見つかっている。西約600mに位置する中小路西遺跡からも鎌倉時代の水路が確認されている。また、南約450mに位置する仏性寺跡は、平安時代末頃に建立されたとされ、同時期の瓦も見つかっている。さらに北方約300mで北野遺跡と接する新伝寺遺跡からは、南北朝時代の区画溝を持つ屋敷なども確認されている。また、遺跡の東端に接する道路は熊野街道に推定され、九十九王子のひとつ「厩戸王子跡」が残されている。

以上のように、櫛井川左岸地域の一部を除いてほとんどの遺跡では、中世を画期としている。しかし北野遺跡においては現在まで中世にかかる遺構はほとんど確認されておらず、やや特異な遺跡といえる。なお、本調査の結果は、過去に断片的に執筆されているが、遺跡の評価や時期など記述で異なる点のある場合は、本文をもって正報告とする。

第二章 層序 (P.L. 2、第4図)

調査区は道路に面した更地であったが、全体に盛土が施されており約70cmを測る。これを除去すると、現代の滋味土(約10cm)、現代の床土(約10cm)確認されるが部分的には失われているところもあった。この下層には灰黄色シルト(約10cm)、にぶい黄色シルト(約10cm)の旧耕作土2層が介在し、これらの床土に相当する明赤褐色シルト(約5cm)が確認される。この下層はマンガンを多く含んだ灰褐色シルト(約20cm)、黄褐色シルト(地山)と続く。遺構は、6層の灰褐色シルト層から切り込んでるものもあった。地山は赤褐色の部分もあり、礫が多く含まれる部分もあった。いずれの層もトレーニングのすべてでほぼ水平の堆積を示し、地山のレベルは、北端で約14.1m、南端で約14.2mを測る。

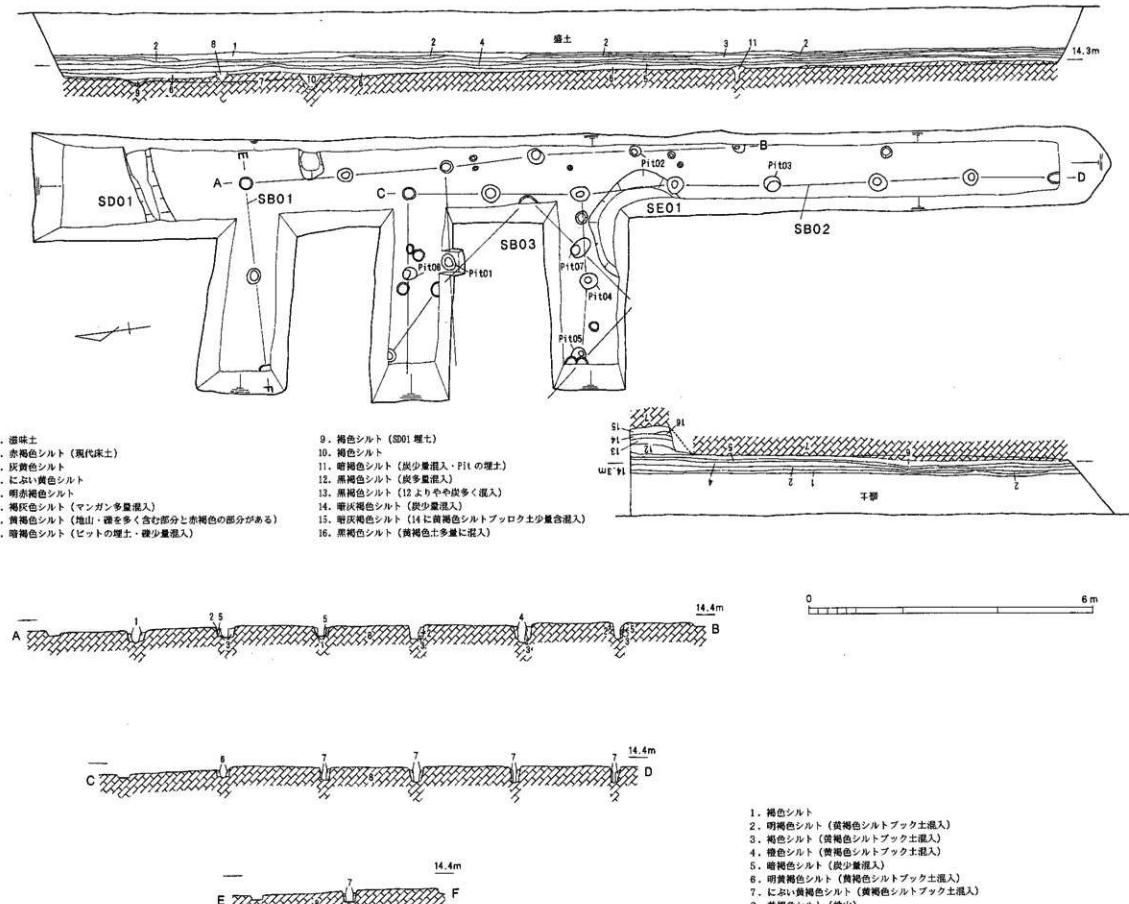


第2図 櫛井川左岸の遺跡

- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 1. 北野遺跡 | 2. 中小路南遺跡 | 3. 中小路西遺跡 |
| 4. 中小路北遺跡 | 5. 新伝寺遺跡 | 6. 中小路遺跡 |
| 7. 一間神社遺跡 | 8. 海会寺跡 | 9. 海會宮池遺跡 |
| 10. 大苗代遺跡 | 11. 仏性寺跡 | 12. 坊主池遺跡 |
| 13. 岡田遺跡 | 14. 岡田西遺跡 | 15. 氏の松遺跡 |
| 16. 鹿頭池遺跡 | 17. 川原遺跡 | |



第3図 トレーニング配置図



第4図 遺構平面図及び断面図

第III章 検出遺構（P.L. 1・2、第4図）

遺構は、掘立柱建物3棟、溝1条、井戸1基、ピット多数を検出した。トレンチが狭小のため、いずれも遺構全体を検出していないが、以下にそれらの概要を記す。

SB01

南北5間以上、東西2間以上の規模で総柱になると考えられる。東西柱列の北側には柱穴が続かないことから北端の柱穴が北面柱列であることが想定できる。柱間は南北柱列では2.0～2.1m、東西柱列では1.7～2.0mを測り、柱筋は、ほぼN・7°・Eを示す。柱穴はいずれもほぼ円形を呈し、径25cm～35cm、深さ25cm～35cm、北端の柱穴のみ約10cmを測り、そのほとんどで柱根を確認した。埋土は、掘方では黄褐色系のシルト、柱根では褐色系のシルトを呈する。遺物は須恵器、土師器椀・皿、土鍾などが出土している。

SB02

南北7間以上、東西2間以上の規模で SB01同様、総柱になると考えられる建物である。こちらも東西柱列の北側には柱穴が続かないことから北端の柱穴が建物の北面柱列であることが想定できる。柱間は南北柱列では北端と南端の柱間が1.7～1.8m、その他は2.0～2.1m、東西柱列では1.7～1.8mを測る。柱筋は、ほぼN・4°・Eを示す。柱穴はいずれもほぼ円形を呈し、南北面の柱穴が径約25cm、深さ10～15cmとかなり浅く、その他は径35cm～40cm、深さ25cm～35cmを測り、そのほとんどで柱根を確認した。このことから SB02は南北5間に南北各1間の庇の付く建物である可能性もある。柱穴の埋土は、掘方では褐色系のシルト、柱根では暗褐色系のシルトを呈する。遺物は黒色土器、土師器椀・皿などが出土している。

SB03

2間以上×2間以上の規模をもつ建物と考えられる。柱間は南北1.8～2.5m、東西方向で確認できるものは約1.3mを測り、柱筋は、ほぼN・40°・Wを示す。柱穴は円形や楕円形を呈し、径25cm～30cm、深さ15cm～30cmを測り、そのいくつかで柱根を確認した。埋土は、掘方では褐色系のシルト、柱根では暗褐色系のシルトを呈する。遺物は黒色土器、土師器椀・皿などが出土している。

SB01

平面形はややいびつな円形を呈するが全体の2/3はトレンチ外である。直径は、検出部分から復元すると約2.2mを測る。断面はややなだらかに掘り込まれ、底面はほぼ平坦になり、深さ約0.7mを測る。埋土は上層は炭を多く含んだ黒褐色系シルト、下層では粘性の強い暗灰褐色系のシルトが規則的に確認され、最下層は地山と酷似する黄褐色シルトをブロック状に含んだ黒褐色シルトで湧水が著しくなった。南東部分で SB02を構成するピットによって切られることから掘立柱建物より先行するものである。遺物は黒色土器、土師器皿などが出土している。

SB01

SB01の北方約1.5mで検出された。幅約0.5m、深さ約10～15cm、断面は緩やかな凹面形を呈し、埋土は褐色シルトの1層である。方向はほぼ東西方向を示し、トレンチ外へ延びる。方向がSB01の北面柱列と一致することからSB01に付随する溝と考えられる。遺物は出土しなかった。

第IV章 出土遺物（P.L. 3・4、第5図）

SB01出土の遺物（1～11）

1は須恵器の甕である。外面は粗い回転ナデで仕上げられ、内面は重ね焼痕が認められる。Pit01の上層から出土している。2は土師器碗である。内外面とも横方向の丁寧なヘラミガキが施される。Pit01の掘方から出土している。3は土師器甕の口縁部である。端部は平坦で、強いヨコナデが施される。Pit02の柱根部分から出土している。4～7は土師器皿である。4・5は底部に糸切痕が明瞭に認められる。僅かに外反する口縁部を持ちヨコナデが施される。6は底部はユビオサエ、口縁部は僅かに内湾しヨコナデが施される。4～6はPit01の掘方、7はPit02の柱根部分から出土している。8～11は土錘である。管玉状を呈する小型のものである。いずれもPit02の柱根部分から出土している。

SB02出土の遺物（12～17）

12は土師器杯または椀と考えられるが、摩滅のため調整は不明である。Pit03の柱根部分から出土している。13は土師器杯である。口縁部は強く立ち上がりヨコナデを施し、底部は緩やかな丸みを持つ。Pit04の上層から出土している。14は黒色土器A類の碗である。立ち上がりが低く、やや幅の広い断面逆台形を呈する高台を有する。Pit05の掘方から出土している。15～18は土師器皿である。いずれも小型のもので口縁部にヨコナデを施すが、斜め方向にまっすぐ立ち上がる（15・16）、僅かに外反する（17）に分けられる。15はPit05の掘方、16はPit06の掘方、17はPit03の柱根部分から出土している。

SB03出土の遺物（18～22）

18は土師器杯または椀であるが摩滅が著しいため調整は不明である。Pit07の柱根部分から出土している。19は甕の口縁部と考えられる。ヨコナデが施され外反し端部は丸みを帯びる。Pit07の掘方から出土している。20～22は土師器皿である。20は口縁部にヨコナデが施され僅かに外反する。端部は丸く肥厚する。底部外面にはヘラ切痕が残され、内面は不整方向のナデが施される。Pit07の掘方から出土している。21は斜め方向にまっすぐ立ち上がる口縁部である。二次焼成を受け赤褐色を呈する。Pit08の掘方から出土している。22は口縁部は欠損しているが平坦な底部を持つものである。Pit07の掘方から出土している。

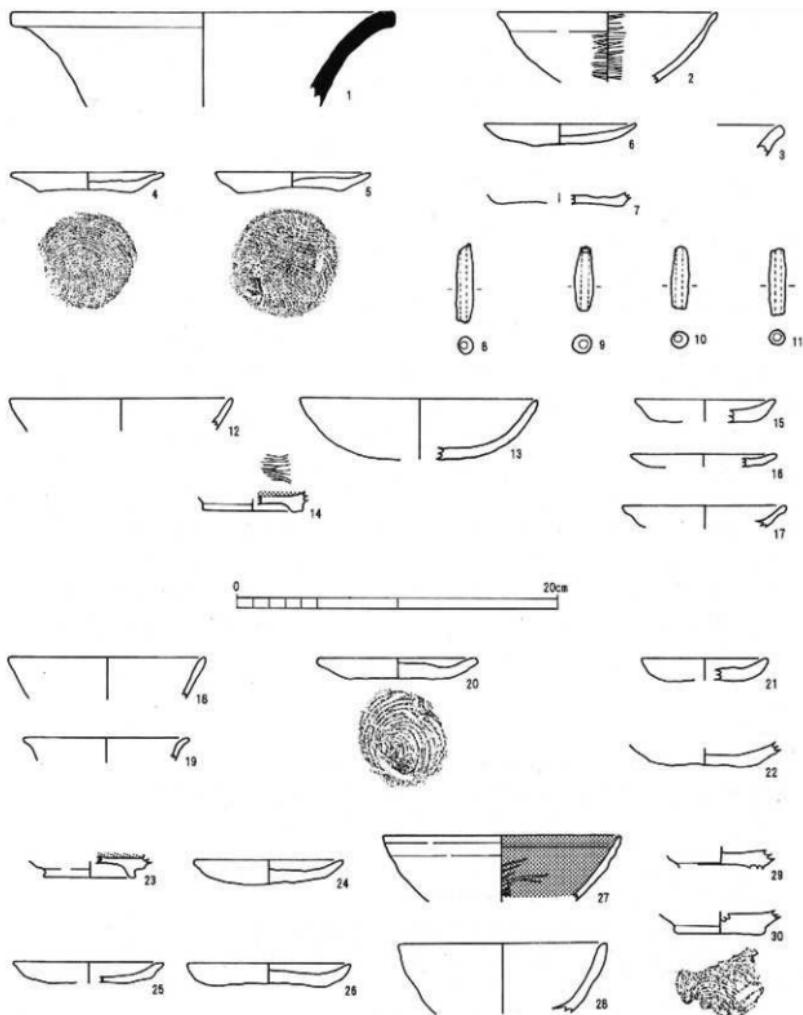
SB01出土の遺物（23～26）

23は黒色土器A類の碗である。斜めに立ち上がる高台で外面は大きく屈曲して立ち上がる。24～26は土師器皿である。底部から口縁部に向かってなだらかに立ち上がる（24・26）屈曲して立ち上がる（25）がある。24の底部はユビオサエにて調整が行なわれ丸みを帯びるが、26の底部は平坦で粘土紹痕が明瞭に認められる。いずれも下層から出土している。

包含層出土の遺物（27～30）

27は黒色土器A類の碗である。「ハ」の字に立ち上がる口縁部で2回のヨコナデを施して仕上げを行

なっている。内面は粗いヘラミガキを施す。28は土師器椀であるが摩滅が著しく黒色土器かの判別は不可能であった。29は黒色土器A類の椀底部であるが、高台部分は欠損している。30は黒色土器A類の底部である。椀になると考えられるが、高台は有さず平底のものである。全体に摩滅が著しいが、底部に糸切痕が認められる。



第5図 出土遺物

第V章 まとめ

調査面積が限られていたにもかかわらず、得られた成果は少なくなかった。まず掘立柱建物であるが、SB01・02は5間以上×2間以上、7間×2間以上といずれもかなり規模が大きい。また、SB01はSD01によって隣まれ、浅いものの周囲からは区画された一定の特殊な建物と見てもよいだろう。またSB02は、柱列の検出状況から5間の建物に南北の庇が付く可能性が高く、これも一定特殊な建物と見られる。一方、SB03は他の2棟の柱列がほぼ南北に並ぶのに対し、まったく軸の一致しない小規模なものである。SE01は、素掘りで井戸としてはかなり浅いもので、飲用水の確保のためよりは小規模な灌漑のための水溜のような機能を持つものと考えた方がよいだろう。

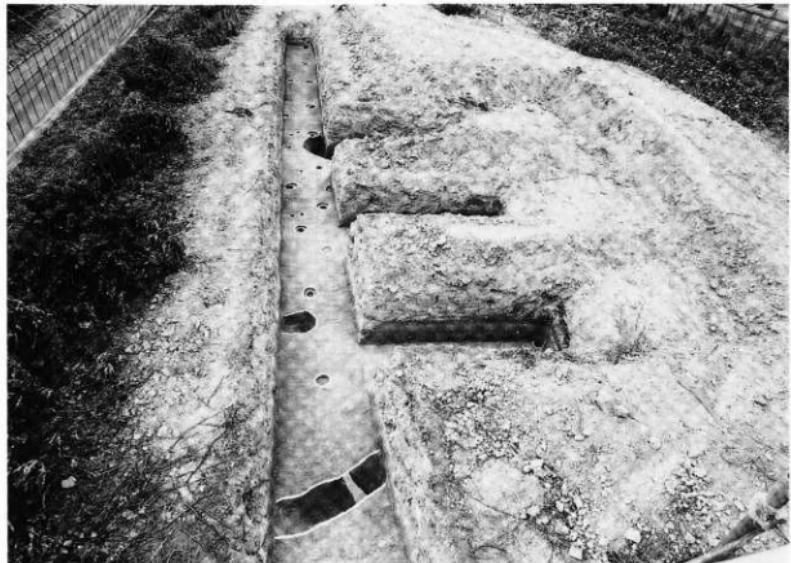
次に遺構の時期であるが、切り合い関係からは、SE01はSB02より古く、SB02はSB03より古い。SB01とSB02の前後関係は不明であるが、建物軸の一致からかなり近い時期と考えられる。またSE01がSB01の建物の中に含まれることから、SB01はSE01に後進するものである可能性が高い。以上を時期で並べるとSE01→SB01 (SD01)・SB02→SB03となる。

遺物は、遺構から出土するものは概ね10世紀後半頃に収まるものである。近隣の遺跡で一般的に出土する中世の遺物は包含層から僅かに出土しているだけであることから、10世紀後半の一時期に成立し廃絶した集落であることが言える。遺構の変遷は、まず灌漑用の井戸が掘られ最初の開発が開始され、直後に、SB01・SB02のような大型の掘立柱建物が作られる。しかし、時を置かず SB03のような小規模な建物に変化し、廃絶したことになる。また周辺約30m付近の調査からも建物が数多く検出されていることを考え合わせるとかなり密集した集落が営まれていたと考えられ、その中でも本調査地域が大型建物を有する中心的な場所であったと推定できるだろう。もう一点注目されるものとして、出土遺物の中に糸切り痕を持つ土器器が比較的目に付くことである。これらは從来より紀伊との関連が指摘されており今後本遺跡の造営集団がどのような人々だったのかを解明する上で重要な資料と言える。

市域における平安時代後期の集落を見てみると、男里遺跡北部の道路調査において2棟、これよりやや南より約300mの調査で2棟の建物が見つかっている。⁹ 今後は男里川流域の集落と樅井川流域の集落を検討することで、泉南地域の平安時代後期の集落形態を解明してゆかなければならぬ。

註

- ① 渡辺昌宏「65-7区『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』」泉南市教育委員会 1981
- ② 大野路彦「北野遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』泉南市教育委員会 2002
- ③ 石橋広和・河田泰之「位階と環境」『市道田端岡田新規に伴う岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』泉南市教育委員会 1995
- ④ 石橋広和「調査の成果」『市道田端岡田新規に伴う岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』泉南市教育委員会 1996
- ⑤ 石橋広和「岡田東遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』泉南市教育委員会 1993
- ⑥ ⑤と同じ。
- ⑦ 広瀬和雄「海会寺」泉南市教育委員会 1985
- ⑧ 石橋広和「大苗代遺跡発掘調査報告書」泉南市教育委員会 2002
- ⑨ 同一著「中小路南遺跡」『泉南市文化財年報No.1』泉南市教育委員会 1996
- ⑩ ④と同じ。
- ⑪ 石橋広和「中小路西遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』泉南市教育委員会 1994
- ⑫ 岡田直樹「尼性寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』泉南市教育委員会 1987
- ⑬ 岡田直樹「新伝寺遺跡」『泉南市文化財年報No.1』泉南市教育委員会 1996
- ⑭ 石橋広和「北野遺跡」『泉南市文化財年報No.1』泉南市教育委員会 1995
- ⑮ 三木弘也「男里遺跡」(財)大阪府埋蔵文化財協会 1994
- ⑯ 石橋広和「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』泉南市教育委員会 1996



トレンチ全景（南から）



トレンチ詳細（西から）

トレンチ詳細（西から）



トレンチ詳細（東から）



Pit01 遺物出土状態（北から）

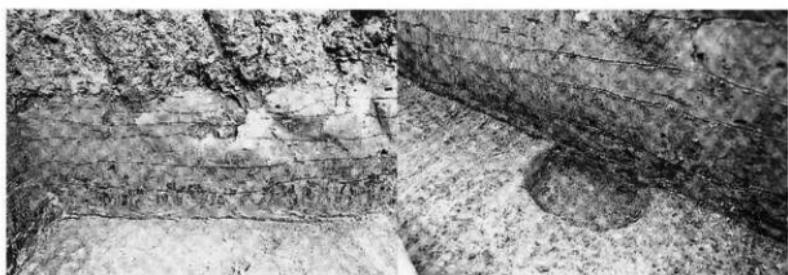


トレンチ全景（北から）



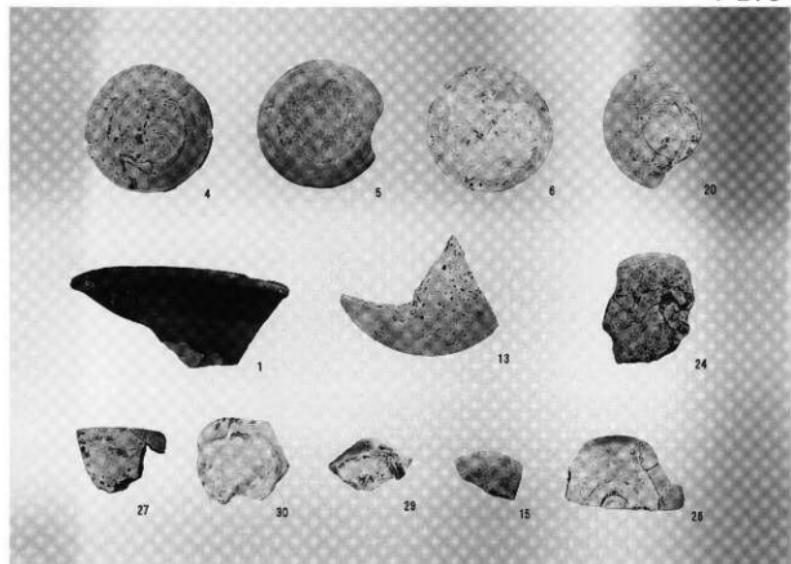
SE01 (北から)

SD01 (南から)

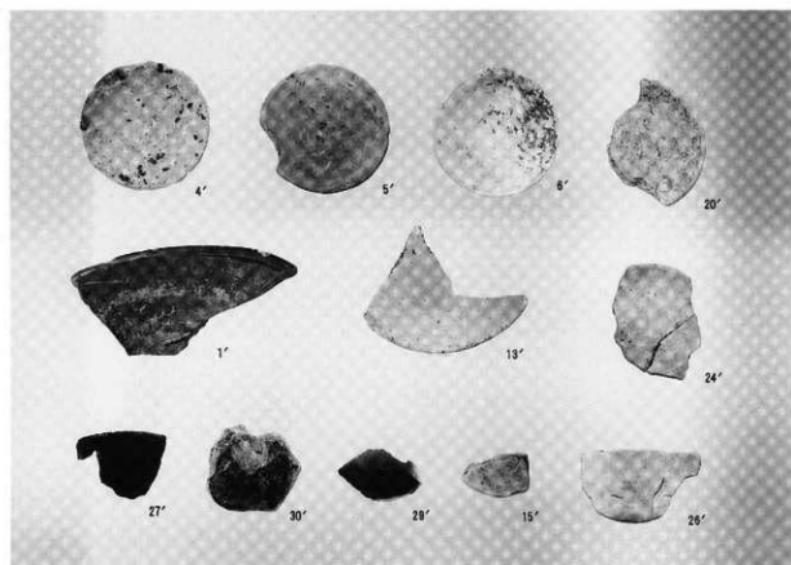


土層断面 (東から)

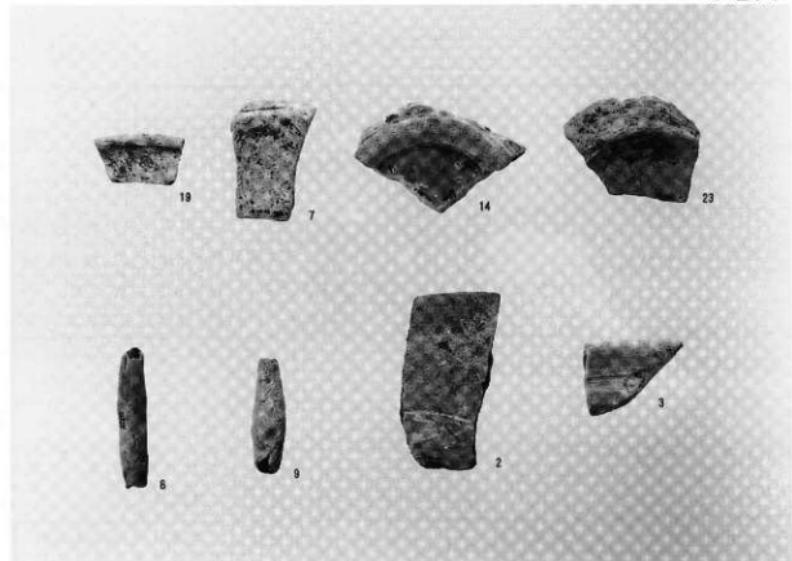
土層断面 (北から)



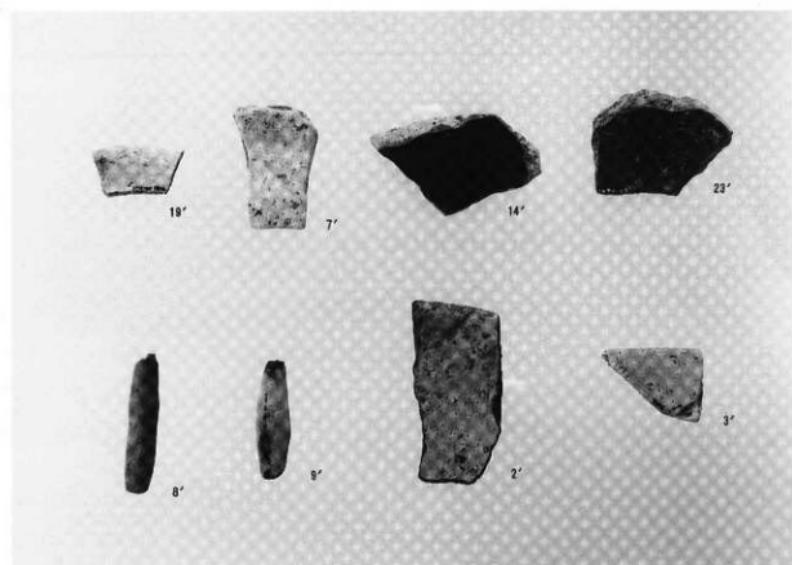
出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3



出土遺物 4

報告書抄録

ふりがな	てんぱけんせつにともなうきたのいせきはくつちようさほくしょ							
書名	店舗建設に伴う北野遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第40集							
編著者名	石橋広和							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市樽井1-1-1 Tel.0724-83-0001							
発行年月日	西暦 2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
北野遺跡	大阪府泉 南市信達 大苗代	市町村名 27228	遺跡 K T	34° 22' 23"	135° 17' 16"	1991.07.22~ 08.03	70 m ²	店舗
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北野遺跡	集落	平安	掘立柱建物 井戸・溝	須恵器・土師器・ 黒色土器・		平安時代後期の集落 を検出。		

店舗建設に伴う
北野遺跡発掘調査報告書

泉南市文化財調査報告書 第40集

2003年3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会

泉南市樽井1丁目1番1号

Tel.0724-83-0001

印刷 翁教オオタ&たんぽぽ

泉南市信達大苗代1138-12

Tel.0724-82-1146

